

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00733

研究課題名（和文）ナレーション音声による日本語教材の開発 - 効果の実証的研究と教材開発 -

研究課題名（英文）"Development of Japanese Language Teaching Materials Using Voice Over - Empirical Study of Effectiveness and Material Development -"

研究代表者

王 伸子（Wang, Nobuko）

専修大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：10233016

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ナレーションの音声がどのような構造を持っているのかを明らかにし、その特徴を生かして日本語教育の教材を作成し、その効果を検証することが目的である。ナレーションの音声の特徴の分析は、おなじく音声をアウトプットする声優、アナウンサーと同じ原稿をそれぞれのプロに読み上げてもらい、全体の時間長を計測し、その差の原因が母音長にあること、ポーズにあることなどを特定した。以上の結果を反映した学習者用ナレーション教材を作成した。また、多くの日本語教師にその教材を使ってもらえるよう、ウェブサイトを作成し、教材にアクセスできるように設計した。また、ナレーターが公開しているボイスサンプルにもリンクしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教師は、常に教材を求めているが、とくに音声に関する教材はレベル別や母語別で発音の困難な点があるということ、音声の指導は得意ではないと感じている日本語教師が多いということで、注目されることが多い。本研究は、語の発音の練習だけでなく、一定の長さのある表現力を習得するために、会話ではなく、内容にも重点を置いた原稿を、プロのナレーターが読んだものを教材としている。既習語彙にはとらわれず、内容に重点を置いた教材を作成したので、日本語教育への貢献度は高いと確信する。また、大学の日本語学の専門科目としてもカリキュラムに取り入れることができたのは大きな進歩であった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the structure of voice over, so called "narration" and utilize its characteristics to create teaching materials for Japanese language education, verifying their effectiveness. Analysis of the characteristics of voice over involved having professional voice actors and announcers read the same script, measuring the total duration, and identifying causes of differences such as vowel length and pauses. Based on these results, some materials of voice over for learners were developed. To ensure accessibility for many Japanese language teachers, a website was created where teachers can access these materials. Links to voice samples by voice over actors are also provided on the website.

研究分野：人文学

キーワード：日本語教育 外国語教育 音声教育 音声表現 ナレーション ボイスオーバー ナレーター 音声教材

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) <従来行われてきた研究と現状>

日本語教育における音声指導は、学習者のコミュニケーション能力を向上させる上で、発話においても聞き取りにおいても重要だと認識されている。従来の研究では、松見法男他(2013)のようにシャドーイング等の有効性を認知心理学的側面から実証してきたにも関わらず適切な話速やポーズを習得する練習の実行は難しいと感じる教師が多いのも現実である。理論的実証が先行しどのような教材が学習者に最適かという、具体的な内容をとまなう教材の提案はほとんどない。

(2) <申請者自身の先行研究と現状>

研究代表者は、学習者自身が音声表現能力の向上に取り組める活動として、プロの声優やナレーターが活動広報のために作成するボイスサンプルを教材として活用することに着目し、従前の3年間、研究を行った。(基盤研究(C):課題番号17K02866)一つの作品が2分ほどと短く、さまざまな場面を想定した原稿を読み上げるボイスサンプルはプロのナレーターの話速、ポーズも体得でき、音声表現力の獲得にとって有用な素材となる。その方法を紹介するワークショップも国内外で実施してきた。さらにカナダのカルガリー大学、トロント大学の研究者の協力を得て授業で導入し、共同研究も行った。王伸子・シャープ昭子・善積祐希子(2018)、王伸子・シャープ昭子(2019)に成果をまとめている。

2. 研究の目的

日本語教育における音声指導に関して、以下の点を明らかにし、さらに教材を作成することが目的である。

第1の点は、コミュニケーション能力に必要な言語能力として問題視されてきた特殊拍だけでなく、表現力全般にかかわる速さやポーズといったプロミネンスに関わるパラ言語情報について学習者が効率的に習得できる方法は何かということと、さらに音声表現力の強化には自己学習の量と質が大きく影響するということの妥当性を追求することである。第2の点は、コミュニケーションを向上させるためのよりよい指導が可能になる「ナレーションボイスサンプル」を教材化し、公開するという点である。

3. 研究の方法

本研究は、(A)日本語音声のパラ言語的特徴の研究、(B)ナレーションボイスサンプルの内容構成と効果の研究、(C)ナレーションボイスサンプルの原稿作成と録音、および指導案の提案、(D)情報発信という4つのフェーズに分けて研究を実施した。最初の2年間は、(A)(B)(C)についての研究と録音教材とワークショップに主眼をおき、続く2年間は情報発信に主眼をおき、全期間を通して日本語教育関係の学会等で研究の成果発表を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の枠組みの確認

語学力の強化には自己学習の量と質が大きく影響することを明らかにし、学習者が自律的に学習できる教材を開発するという理念から、研究代表者は、学習者の音声的問題点を明らかにする研究を続け、論文を執筆してきた。さらに分野は異なるが、ヒトの音声表現力の強化に結びつく理論に出会ったが、それを確認できたのもこの研究成果の一つである。当該研究は、岡ノ谷(2010)、Okanoya(2015) である。トリはさえずりを、ヒトは言語を上達させるために一定の練習を積むのであり、聞いて覚える「感覚学習」を経て覚えた音を、自分でも言えるように練習する「運動学習」によって話せるようになっていくことを明らかにしている。この仕組みをもつ動物はトリとヒトのみであり、トリとヒトが共通して持つ神経回路、ミラーニューロンが、音楽と言語を、あるいは行動を繋げるという働きをすることも明らかにしている。つまり、ヒトが言語を上達させるためには一定量のインプットと練習が必要であり、そこに音楽を介在させることは有益であり、ボイスサンプルを繰り返し練習し、さらに BGM を付けることも、よりよく学習するという支援につながると考えられることから、従前の研究代表者の研究を活かし、ボイスサンプルを活用した音声教材を開発することに妥当性があると確認できた。また、「ボイスサンプル」を応用した指導については、2017～2019 年度に行ってきた研究（基盤研究（C）課題番号 17K02866）により、基礎的研究を行い、日本国内の大学で高度な日本語を使用する学習者には、ある一定の長さでコンテンツのあるナレーション素材が効果的であるということと、海外の大学における学習者も、コンテンツによって動機付けが明確になり、学習が積極的になるということを確認した。

（2）日本語教師と学習者への聞き取り調査

日本語教師は、従来の音声教材で音声指導を実施しているが、音声指導は難しいと感じている日本語教師が多いことも、聞き取り調査の結果、明らかになった。その理由は、以下の通りである。

- ① 指導しながら可視化することが難しい（音声は見えないから）
- ② 学習者の音声表現の評価を教師の感覚に頼っている

また、発音よりも文法や語彙の指導が優先されているという教科書にも問題はあろう。学習者は学習している言語を、よりよい音声でアウトプットしたいと思っはいるが、単語の発音練習だけでは、学習者がイメージしている流暢性は実現できない場合が多い。また、アニメのキャラクターボイスなどに影響される学習者がいる一方、日本国内の学習者には、聞いて楽しめる音声と、自分が使用する音声は別だという気付きが生じていることも、聞き取り調査の結果、わかってきた。（図 1）

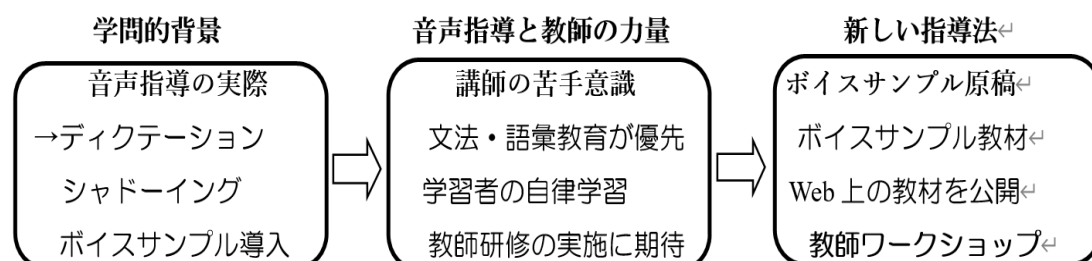


図 1 音声教育について日本語教師が求める教材

（3）教材の開発とウェブサイトの公開

教材の使い方を指南するページと、教材にアクセスできるページを作成し、日本語教師や学習者自身が教材を選ぶことができるように設計した。（図 2） 以前、簡単に作成した

ものは Google サイトを使用したものであったが、中国など Google が使用できない国と地域もあることから、ウェブページを業者に委託し作成した。今後も、新しい教材を作成し、加筆することができる設計である。(図3)(図4)

URL [https:// voice-renshu.sakura.ne.jp/](https://voice-renshu.sakura.ne.jp/)



図2 トップページ



図3 原稿作成用ページ

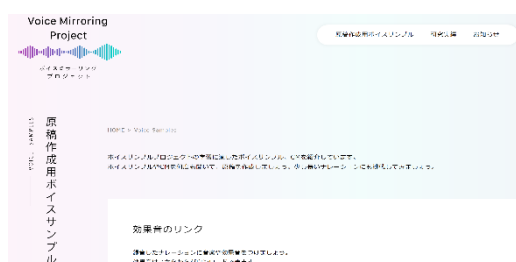


図4 ボイスサンプル動画アクセスページ

(4) 研究成果の発表と、大学の授業設置の実施

本研究課題について、発表論文は8本、口頭発表は8本であった。教師研修およびワークショップを実施する予定であったが、コロナ禍で国内外の活動が制限されてしまった。口頭発表も、そのほとんどはオンラインであり、対面での活動は予定通り行えなかったが、ウェブサイトを作成することで、広めることに努力した。

また、前回の科研費による研究「「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究と開発」(17K02866)では、国際コミュニケーション学部日本語学科の専門科目として、専門科目の選択科目としてナレーションを活用した授業「日本語表現論1」を設置したが、本研究課題「ナレーション音声による日本語教材の開発-効果の実証的研究と教材開発-」(20K00733)でも、専門科目の選択科目として、音声表現とメディアにおける表現を学ぶ授業「メディア日本語論2」を設置し、運営することができた。これらの授業は、日本語学習者だけでなく、将来、日本語教師を目指す一般学生も専門的な音声表現の研究方法を学ぶことができる授業であり、研究結果が大学教育に還元する結果を残すことができた。

引用参考文献

- 1 王伸子 (2017) 「「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究」“CAJLE2017” pp.272-278
- 2 王伸子 (2018) 「新しい日本語音声指導法「ボイスサンプルプロジェクト」とその教師研修ワークショップ」“The 24th Princeton Japanese Pedagogy Forum 2018” pp.319-329
- 3 王伸子 (2018) 「新しい日本語音声指導法「ボイスサンプルプロジェクト」の教材化とその評価」“CAJLE2018” pp.299-306

- 4 王伸子 (2019) 「ナレーションを活用して 4 技能を伸ばすアクティブラーニング—アニメの非日常性と比較したナレーションの日常性の観点から—」 “The 25th Princeton Japanese Pedagogy Forum 2019” pp.51-60
- 5 王伸子、シャープ昭子、善積祐希子(2018) 「新しい日本語音声指導法「ボイスサンプルプロジェクト」の教材化とその評価 “CAJLE2018” pp.299-306
- 6 王伸子、シャープ昭子 (2019) 「日本語クラスにおけるナレーション導入効果の検証—カナダと日本の大学における教室活動—」 “CAJLE2019” pp.334-340
- 7 岡ノ谷一夫 (2010) 『さえざり言語起源論』
- 8 松見法男他 (2013) 「中国国内の中級日本語学習者におけるシャドーイングの有効性」『学校教育実践学研究 13』
- 9 Okanoya (2015) Evolution of song complexity in Bengalese finches could mirror the emergence of human language. *Journal of Ornithology*.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 王 伸子 Nobuko Wang	4. 巻 The 29th
2. 論文標題 GIF アニメーションとナレーションで作成する日本語教材	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PJPF Princeton Japanese Pedagogy Forum 29th Proceedings	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 王 伸子(Nobuko Wang)	4. 巻 The 28th
2. 論文標題 初中級日本語学習者の音声を支援する教材作成 日本人大学生との協同活動と効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PJPF 28th Proceedings	6. 最初と最後の頁 417- 425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 王 伸子	4. 巻 51
2. 論文標題 ナレーションを活用した言語教育の音声教材：ランゲージアーツに着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 専修大学外国語教育論集	6. 最初と最後の頁 79～92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34360/00013234	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 王 伸子	4. 巻 The 27th
2. 論文標題 「振り返り」の自己評価を取り入れたスピーチトレーニングはなぜ効果的か 母語の発話の観察-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PJPF 27th Proceedings	6. 最初と最後の頁 419-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 王 伸子	4. 巻 2021
2. 論文標題 日本語教育の教材としての音http://www.senshu-u.ac.jp/声素材の音響的分析 ナレーション、アナウンス、声優ボイスオーバーの分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CAJLE 2021 Proceedings	6. 最初と最後の頁 212-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王 伸子	4. 巻 第50号
2. 論文標題 日本語教育音声教材のための音声素材の音響的分析 : ナレーション、アナウンス、声優の声の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 専修大学外国語教育論集	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34360/00012505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王伸子	4. 巻 第49号
2. 論文標題 ナレーションとボイスサンプルを活用した日本語音声指導の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学外国語教育論集	6. 最初と最後の頁 99-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34360/00011676	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nobuko Wang	4. 巻 2018
2. 論文標題 日本語クラスで使用する新しいメソッド「ボイスサンプルプロジェクト」の提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 National Symposium On Japanese Language Symposium	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 王 伸子 (Nobuko Wang)
2. 発表標題 GIF アニメーションとナレーションで作成する日本語教材
3. 学会等名 Princeton Japanese Pedagogy Forum (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 王 伸子 (Nobuko Wang)
2. 発表標題 音声表現力と音声観察力の向上を目指す多様なアクティブラーニング 新しいメディアstand.fm を活用した教室活動
3. 学会等名 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 王 伸子
2. 発表標題 初中級日本語学習者の音声を支援する教材作成 日本人大学生との協同活動と効果
3. 学会等名 Princeton Japanese Pedagogy Forum (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王 伸子
2. 発表標題 ナレーションを活用した言語活動ー覚えるキミから発信するキミへー
3. 学会等名 日本実験言語学会 第15回大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王 伸子
2. 発表標題 「振り返り」の自己評価を取り入れたスピーチトレーニングはなぜ効果的か 母語の発話の観察-
3. 学会等名 Princeton Japanese Pedagogy Forum (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王 伸子
2. 発表標題 日本語教育の教材としての音声素材の音響的分析 ナレーション、アナウンス、声優ボイスオーバーの分析
3. 学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王 伸子
2. 発表標題 ナレーションを活用した日本語音声指導と教材作成 - 教師が作れる初級用音声教材
3. 学会等名 中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王伸子
2. 発表標題 アニメのセリフに現れる非日常性ー日本語教育の立場からー
3. 学会等名 日本アニメーション学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 王伸子
2. 発表標題 ナレーション原稿の分析と日本語音声教育としての教材化
3. 学会等名 国際交流基金北京 第5回理論と実践をつなぐ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究内容を反映して、新しい専門科目を作り、科目担当責任者となった。科目の専門的知識の講師は、協力講座として、ナレーションマネジメント会社（スタジオバース）および、放送局番組制作会社（TBSスパークル）が担当。日本語表現論1は、スクールバースに依頼したが、メディア日本語論2は、TBSスパークルが、本研究成果を見て、担当したいと連絡をとってきたものである。科目の位置付けは以下の通りである。
専修大学国際コミュニケーション学部日本語学科 科目区分（専門科目-基礎科目）
日本語表現論1
メディア日本語論2
以上、2科目を設置し、日本語表現論1ではナレーション、メディア日本語論2ではメディアの音声表現（アナウンス、ニュース原稿作成等）を学ぶ専門科目となった。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 「ボイスミラーリング」を取り入れた音声指導 日本語の表現力を高めようー	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------